【ねがいましては】

平成２３年４月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２４６号

「信頼その２」

４月９日付の読売新聞夕刊に大きな見出しがありました。「避難児童の列に津波」

宮城県石巻市立大川小学校の全校児童１０８人のうち７割が死亡・行方不明。教諭については、校内にいた１１人のうち９人が死亡、１人が行方不明。

死亡・行方不明になった児童たちのご家族、助かった児童たち、たったひとり生き残った教諭、当事不在だった校長先生。その方々の心中を思うと胸が張り裂けそうになります。

地震直後、先生方の誘導で校庭へ移動した児童たちは、先生方と一緒に近くの堤防の高台を目指していました。そこへすざまじい音とともに津波が押し寄せたのだそうです。列の後方にいた一部の児童と教諭のみが向きを変えて裏山に駆け上がり助かりました。

津波に飲まれた子どもたちは先生を頼るしかなかった。そこには強い信頼があります。でも・・・。

波に飲み込まれてゆく子どもたちをどのような気持ちで先生方は眺めていらっしゃったのでしょう。

目の前にいる子どもたちを救うことができずに、自らも波に飲み込まれてゆく無念さを思うと・・・。

助かった子どもたちはその時の恐怖を心にしまったまま、これからの人生を歩むことになります。もう会うことのできない友だち、先生、変わり果てた学校。

学校生活の思い出のエンディングに津波が刻み込まれます。残酷を通り越えた経験です。

どうにもならないこと・・・。でもなんとかならないのか・・・。

そのふたつが私の中でぐるぐるとまわり続けます。

残された方々は「復興」という目的に向かって、日々懸命の生活を続けることになります。そこからは新しい新鮮な感情も芽生えるはずです。

『信頼』です。

被災者は弱者、弱者だからこそ『信頼』は生きてゆくために必要な宝物だと思います。初めて会った方とも笑顔で挨拶をし、お互いに助け合えることがあれば進んで助ける。「ありがとう」というこころがお互いの中に芽生える。物ではない、人が人らしくなれる瞬間。ひとの基本が溢れます。

辛い時にこそ改めて人は「ひと」らしさを再認識するのかもしれません。「ひとってこんなにも温かいものだったんだ。」

これからいったいどうやって暮らしていけばいいのだろうと、毎日途方に暮れる方も多くいらっしゃるはずです。その傍らで笑顔を見せながら遊ぶ子どもたち・・・。今を精一杯に生ききる子どもたち。その笑顔にハッとさせられる方々は多いはずです。

「そうか、くよくよなんかしてられねー、こうして生きていることに感謝せねば。」

「亡くなられた方々の無念を考えれば、残されたものたちはその方々の分まで精一杯に生きねば・・・。」

今、復興に向け、徐々に前を向き始めた被災地の方々から、私たちは生きることの意味を学びます。

何もしてあげられない私たちは、逆に被災に遭われた方々から生きることの意味を教わっているような気がいたします。

「がんばってください。」と、よく耳にするのですが、私はどうしても素直な気持ちで聞くことができません。

「どんなにがんばったって・・・これだよあなた。そういうあなたはがんばっているのかい。ひょっとしてがんばっていないあなたから、そうは言われたくないね・・・。」

被災に会われた方々は、「がんばって」って言われなくてもがんばるしかない。

「『がんばって』と言われると、何か今の私たちががんばっていないみたいじゃないか。」そう言い返されそうです。

とても失礼な気がするのです。

少しずつ日常が帰ってきつつある私たちの生活。子どもたちは新学期を迎えました。子どもたちと先生方の間で、お互いに「信頼」というプレゼントを交換し合う光景。そんな光景が毎日のように教室の中で溢れていればと思います。

無念の中で流されていった先生と子どもたち、その方々の中にあった信頼を私たちはしっかり心に受け取りながら、これからの人生を精一杯に生きていかなければならないと思います。

物が溢れかえってしまった私たちの生活から忘れ去られがちな『信頼』。

信頼は人らしさを生み出します。人が人になるには、信頼が必要です。

お互いの中に信頼があるからあいさつができる。お互いの中に信頼があるからニコッと笑える。お互いの中に信頼があるから助け合える。お互いの中に信頼があるから涙を流せる。お互いの中に信頼があるから言えるんだよ。

「ありがとう。」